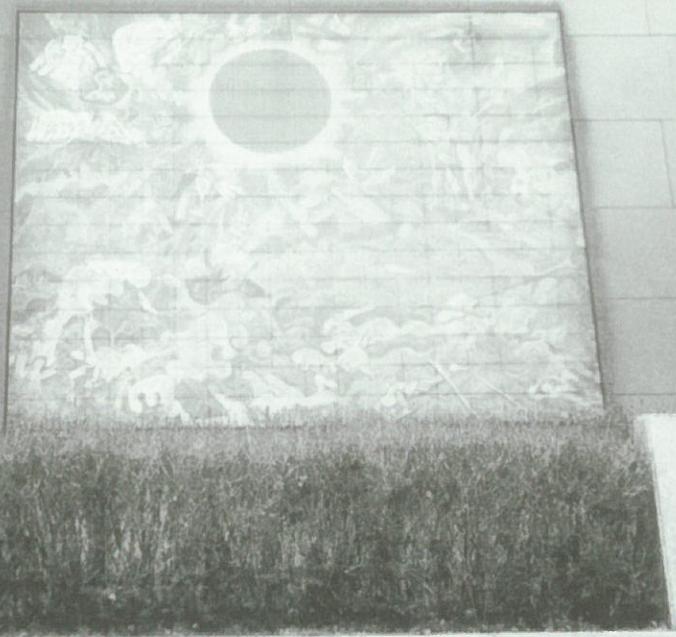


# 水害記念碑



明治二十二年八月十八日から二十日かけて、十津川村は未曾有の暴風雨に襲われ、死者百六十八名に及ぶ大被害をこうむつた。この明治大水害によって六百戸二千六百名に及ぶ住民は北海道移住を余儀なくされ、幾多の苦労の後に新十津川町を創るところとなつた。また、荒廃した村に残された住民は艱難辛苦を乗り越えて復興に当たり、今日の十津川村の繁栄を築くに至つたのである。

こうした先人たちの北海道移住の壮舉に学ぶとともに、復興の苦闘を偲びながら、十津川村は平成二年十月に置村百年を記念して、新たな世紀に向けて「大いなる十津川」の創造を誓いつゝ水害記念碑を建立した。往時を追憶し、犠牲者を悼むものであることは言うまでもない。

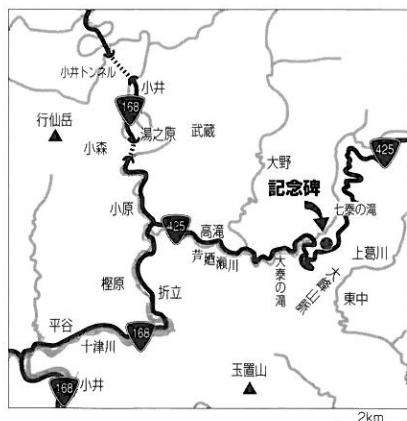
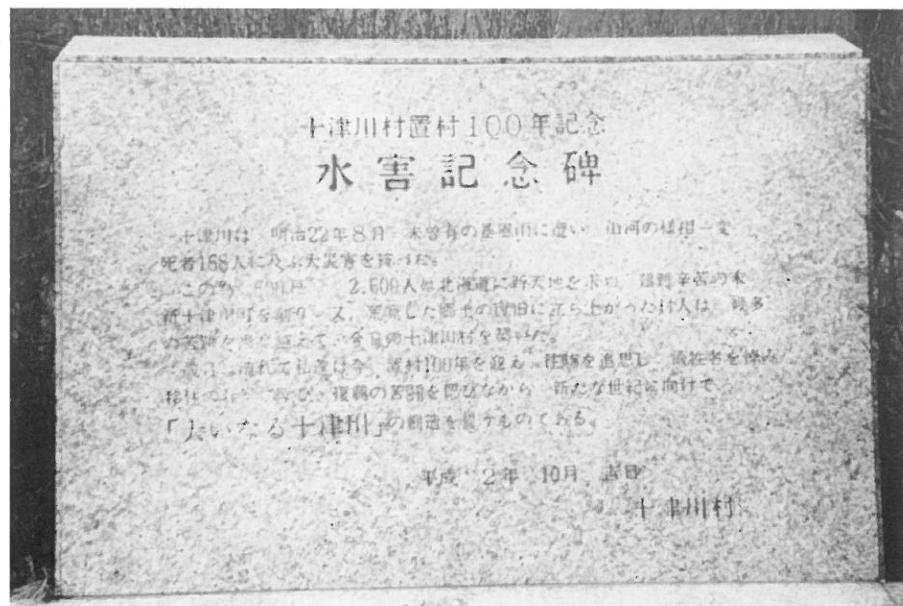
## 十津川村置村100年記念

## 水害記念碑

「十津川は、明治22年8月、未曾有の暴風雨に遭い、山河の様相一変、死者168人に及ぶ大災害を被った。この為600戸2,600人は北海道に新天地を求め、艱難辛苦の末新十津川町を創り、又、荒廃した郷土の復旧に立ち上った村人は幾多の苦難を乗り越えて、今日の十津川村を築いた。」

歳月、流れで私たちは今、置村100年を迎える時を追想し、犠牲者を悼み移住の壮舉に学び復興の苦闘を偲びながら、新たな世紀に向けて、「大いなる十津川」の創造を誓うものである。

平成2年10月吉日  
十津川村



## ▶ 交通案内

◎JR和歌山線五条駅下車 奈良交通バス(十津川温泉行き・湯ノ峰行き)  
十津川村役場前バス停下車乗り換え村営バス滝八丁行き  
白谷口バス停下車 徒歩15分

◎国道168号と国道425号の交差点(地名:滝)より国道425号を東へ11km  
車で約25分

## ▶ 所在地

奈良県吉野郡十津川村大字小川地内

▶ 水系名及び溪流名  
新宮川水系 芦廻瀬川

## ▶問い合わせ先

奈良県砂防利水課 電話0742-22-1101



# 羽根谷築堤記念碑



岐阜県南部養老山地の羽根谷は急流河川であり、流域は樹木の濫伐により禿山となり土砂流出が激しく、地域の田畠に甚大な被害が発生していた。また流下土砂が揖斐川の河床を上昇させ、木曾三川下流域は水害地帯となっていた。このため明治政府はオランダ人水理工師ヨハネス・デ・レーヶを招き、木曾川下流工事を計画した。しかしデ・レーヶは濫伐による山々の荒廃状況に鑑み、本川改修に先立つて木曾川下流改修の一環として羽根谷、盤若谷、山崎谷などの山腹工、堰堤工、護岸工、土砂打止を建議した。これに沿って内務省の直轄工事が工費三万九千七百八十九円八十八銭を投じて実施され、明治二十四年三月に完成。これを記念して石碑を建立したものである。

岐阜縣知事從二位勲八等小崎利準篆額

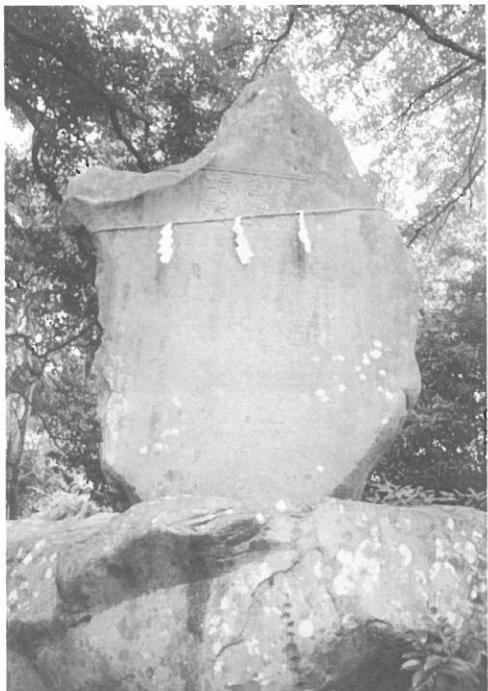
羽根谷築堤記

美濃國下石津郡西駒野村奥條村共有山有溪曰羽根谷白石磊塊而淫潦一至則激水決岸流亡之害無歲無之蓋濫伐樹木之所致也明治十一年一月內務省遣吏興工土砂之流下者植苗樹而扞焉谷築瀉水之侵衡者築石堰而防焉至明治二十四年三月竣工其工費三萬九千七百八十九圓八十八錢提記今也植樹繁茂築石堅牢無復流亡之虞於是同志者相謀建碑表之以戒後世濫伐之弊又欲以使知官思民艱之厚也

明治二十四年三月 岐阜縣屬林逸選并書

訖文 羽根谷築堤記

美濃の國下石津郡西駒野村奥條村、共有山溪有り、羽根谷といふ。白石磊塊しかして淫潦一たび至れば則ち激水岸を決し流亡の害、歲としてこれ無きは無し。けだし樹木を濫伐するの致す所なり。明治十一年一月、内務省吏を遣わして工を興す。土砂の流下するものには苗樹を植えてこれを扞ぎ、瀉水の侵衡する者には石堰を築いてこれを防ぐ。明治二十四年三月にいたつて竣工す。其の工費三万九千七百八十九円八十八銭なり。今や植樹は繁茂し、築石堅牢にして流亡の虞無し。是に於て同志の者相謀り、碑を建てて之を表し、以て後世濫伐の弊を戒め、又以て官の民艱を思うの厚きを知らしめんと欲するなり。



▶交通案内

- 近畿鉄道養老線駒野駅下車 徒歩25分
- 名古屋方面から 名神高速道路 大垣インターチェンジより約15分
- 四日市方面から 東名阪高速道 桑名東インターチェンジより約20分

▶所在地

岐阜県海津郡南濃町羽沢

▶問い合わせ先

岐阜県砂防課 電話058-272-1111

## 供養塔

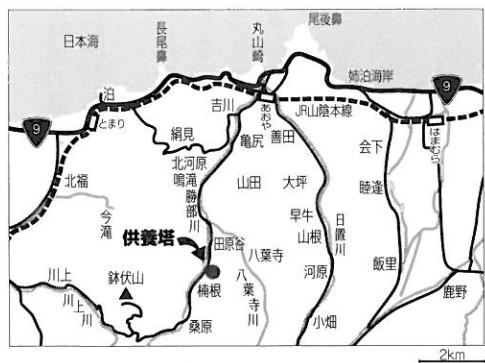
明治二十六年十月十四日から十六日にかけて鳥取県を襲った暴風雨は、県下に未曾有の大災害をもたらした。青谷町では、東町、西町、前町などが浸水し、下町では四十戸が流失した。奥部から流出した家屋の木材などが塩脇から井手浜まで山をなし、人畜の遺体を中から掘り出したり、海上から引き揚げるなどという痛ましい惨状が記録されている。

とりわけ勝部村の紙屋では、集中豪雨に起因する山崩れが発生し、四十一名の犠牲者が出了た。それらの犠牲者の靈を弔うため、明治二十八年初夏、水災供養塔が弥勒寺の境内に建立された。供養塔の裏側には犠牲者全員の名前が刻まれている。



碑文

表 面	死 者
裏 面	犠牲者 の名前
側 面	藤内周三郎
世話人	明治二十八年初夏



▶ 交通案内

◎JR山陰本線青谷駅下車  
日ノ丸バス桑原行き勝部診療所前バス停下車 徒歩1分

◎国道9号青谷入口交差点より7km 車で約14分

▶ 所在地

鳥取県気高郡青谷町紙屋

▶ 水系名及び溪流名

勝部川水系勝部川

▶ 問い合せ先

鳥取県砂防利水課 電話0857-26-7111



# 菩提之碑

群馬県、勢多郡栄村にある石碑である。

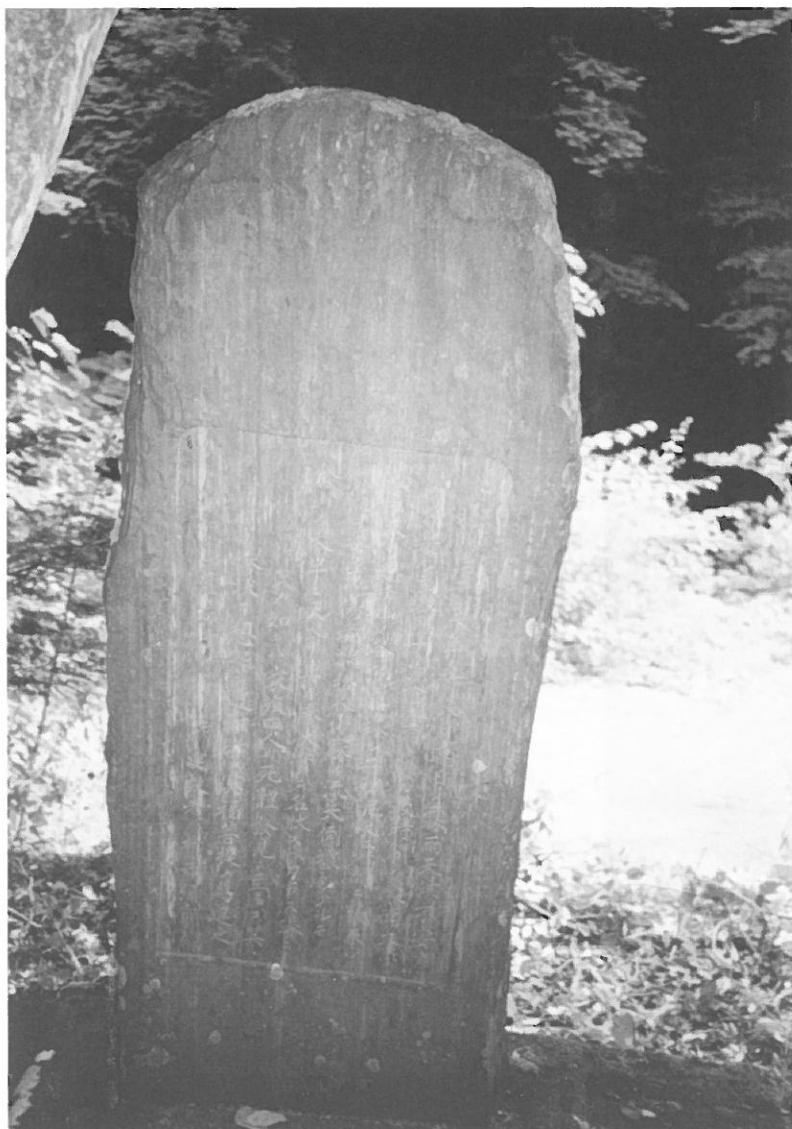
明治二十八年九月八日、連日降り続いた雨が暴風雨と化し、数時間の豪雨の末に大洪水となつた。これによつて山の各所が崩壊し、激しい土石流となつて人家などに襲いかかり、死傷者数十名を数える大災害を全山にもたらしたという。このときの犠牲者の靈を慰めるため、村井彌市氏が昭和十二年に「菩提之碑」を建立した。村井氏の縁者の話によると、この碑に隣接して「御料木炭謹製之跡」の碑があることから、このあたりは薪伐りや炭焼きが盛んであったという。したがつて、菩提之碑は上流の金山沢で発生した土石流によつて遭難した、炭焼きに携わっていた人々の冥福を祈つて建てられたものと思われる。



碑文

表  
裏  
面  
水難者菩提之碑

維時明治二十八年九月八日連日ノ霖雨天候不安ナリシカ果シ  
テ激烈ナル暴風雨ト変ス數時間ノ豪雨大洪水ヲ来シ忽チ山ノ  
各所崩壊シ土砂泥流水瞬間ニ來襲シ激流ニ呑レ死傷数拾人小家  
ノ流出倒壊シタルモノ全山ノ大半ニ及ヘリ其ノ惨状實ニ名状ス  
ヘカラス殊ニ笛川善作氏ノ如キハ家族四人ノ死體発見ニ至ラス  
其ノ當時ノ惨状ヲ想起シ遭遇者ノ冥福菩ノ為建立



▶交通案内

◎JR両毛線よりわたらせ渓谷鉄道沢入駅下車  
沢入駅より約5.5km 徒歩約1時間20分

◎国道122号線より沢入駅方面へ 沢入駅より黒坂石バンガローテント村方面

へ

黒坂石バンガロー村手前蚕影山橋を渡り右折(林道楓名條線)約1.3km

▶所在地

群馬県勢多郡東村黒坂石地先

▶水系名及び溪流名

利根川水系渡良瀬川左支黒坂石川左小支楓名條沢

▶問い合わせ先

建設省渡良瀬川工事事務所 砂防調査課 電話0284-73-5559



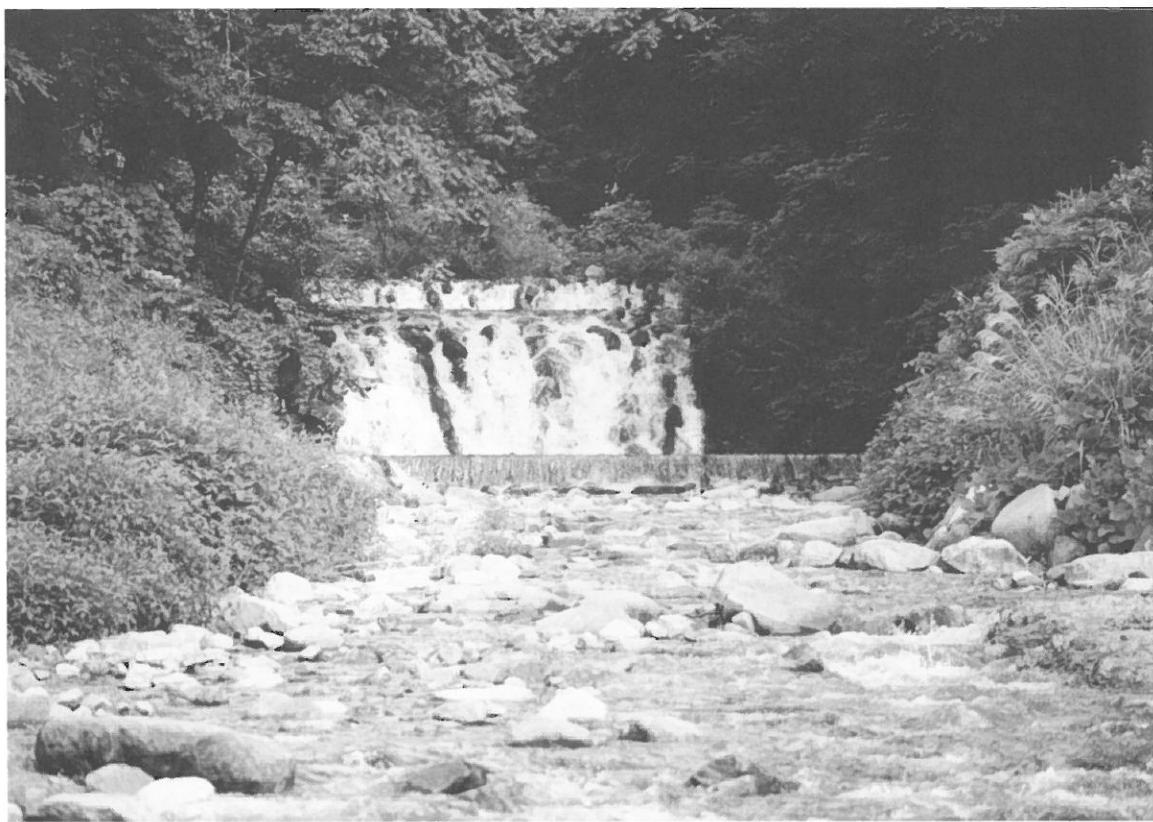
## 砂防工紀念碑

福井県では、明治維新後の廢藩置県以来、多くの森林が伐採され、焼き畑などが無制限に行われた。このため、斜面崩壊が発生し、土石流災害に苦しめられてきた。水路埋塞など毎年に被害が拡大するにしたがい、対策を要求する声も大きくなってきた。これを受け明治二十五年（一八九二年）十一月に県会で土砂抑止の建議が可決された。

明治二十七年には、臨時県会において砂防工費一千七百四十円が議決され、県として初めての砂防事業が実施されることになり、旧大野郡上庄村佐開地係真名川支流の鬼谷川に石積堰堤を築造する工事が始まった。

この石積堰堤の完成により、出水毎に変動していた川床が安定したため灌漑取水の苦勞がなくなり、佐開区民は歓喜相協力し、これを記念して明治三十年に建立したものである。





鬼谷川の石積堰堤

記念石碑とともに現存し、現在でも土砂流出の防止効果を發揮している明治30年代に築造された福井県最古の石積堰堤

碑文

砂防工紀念碑

明治三十年十一月

横田 荦(はぐこ)

大野藻漢学者

福井師範の教員

明治三十二年一月一日 六八才病没

書



▶ 交通案内

- ◎JR越美北線大野駅下車 京福バス堀兼行き堀兼バス停下車 徒歩約15分
- ◎JR大野駅より車で20分

▶ 所在地

福井県大野市佐開地先

▶ 水系名及び河川名

九頭竜川水系鬼谷川

▶問い合わせ先

福井県砂防課 電話0776-21-1111



## 砂防の碑 (北田用水碑)

愛知県名古屋市の東部に位置する白沢川の治水事業は、江戸時代から行われており、水害の発生はなくなつた。しかし、小幡地区一帯は灌漑に不便な土地となつてしまつた。時は移つて明治三十五年（一九〇二年）、県が土木工事を行い、水を満々と蓄えた三つの沼を作つたのである。これはこの地域の砂防工事として行われた治水事業であつたとともに、灌漑をかねた土堰堤づくりの事業でもあつた。

これに長い水路を設けて水を引くことで、小幡の荒れ地は肥沃な水田に姿を変えた。村に二十五町余りの一毛作田を開くことに成功したのである。

事業を記念して建てられたのが、この砂防の碑（北田用水碑）である。残念ながら、昭和二十年（一九四五年）三月の空襲により、上部が破損し現在の姿となつた。



北田用水碑要約

※○は欠損



愛知県知事從三位勲二等深野一三等額  
白沢川の曲がりくねつた堤は○○○○○○○○○○二つの山の間を西へ流れてみなぎり○○○○○○○元禄○○下  
条正蔵が幕府に求めて○○離れ松に水路を掘り莊内川に○○。治水に成功して後、諸村は長く水害をまぬが  
れたが、小幡地区一帯は灌漑に不便となり○○○數百年を経た。明治三十五年県は土木工事を起し、小幡村  
の住民は上流に堰を築いて砂の害を防ぐことを○○、当局はこれを認め、技師大村幸造にその事業を担当させ  
た。堰を築くと三つの沼は大きな池となり、たくわえられた水は十分な量を保つて流れ出した。長い水路を設  
け、南に水を導いたところ、小幡の村の二十五町は、荒れた農地も肥沃な水田に変わり、稻の穗が勢いよく成  
長し、平らに耕された畠も広がるようになつた。この事業には砂防工費一万余円、そのうち二千八百二十五  
円と、水路開削費および水門建造費など六千六百七十五円は、村民から出されたものである。明治三十五年  
十月に起工、三十七年五月に完成。当初は事業規模の大きさと巨額の経費のために、工事反対の意見もわき  
おこり、委員は各方面へ説得をおこない、ついに協力体制を築き上げたのである。工事完成に及び、人々は皆深  
い敬意をあらわして、大村技師の計画の適切さをたたえた。委員各位の努力と苦心のたまものであり、さか

た。徳川氏の世となり立派な役人が水害ととりくんだけれども、十分な成果をあげ得なかつた。明治時代になり文明が発達し、官民一体の努力の結果、治水の大事業に成功、狐や兔の遊んでいた昨日までの荒地は、今日農民の行きかう見事な水田となり、種まきから無事収穫を終えて豊作の祭りをするまでになつた。人々はやすらぎ、郷土によろこびの声があがめあふれている。

● 交通客內

○名古屋鉄道瀬戸線「おばた」駅から徒歩5分

○東名阪自動車道小幡インターチェンジから約1.5km

東で3分

平成30年

愛知県名古屋市守山区小幡西1丁目13地先白山神社境内

## 支流水系名一覧

### 庄内川水系支川自沢川緑ヶ池始め

### ▶問い合わせ先

愛知墨砂防課 電話052-961-2111

A map of Aichi Prefecture with a black dot indicating the location of Nagoya City.

# 山崩遭難供養塔

愛知県南設楽郡鳳来町大代は千枚田で名高い地形を持つ。この地を明治三十七年七月十日、土石流が襲った。梅雨前線の停滞によって長雨が続き、地盤がゆるんでいたことに加え、台風の襲来が重なったことにによるもので、字鞍掛飛渡ヨリ山崩と記されている。被害は死者二名、全半壊家屋十戸、馬二頭も犠牲となつたと記録されている。この石碑は昭和三十一年に地元有志により建立されたものである。



## 碑文

山崩遭難供養塔

明治三十七年七月十日　宇鞍掛飛渡ヨリ山崩  
死者十一名家屋全半壊十戸馬二頭

高橋三公「万葉集」の序文

高橋庄松文母

夏目宗平方母志す

高麗文書

卷之三

夏目祐二郎が長女たる孫母也

丸山佐次郎方姪よし

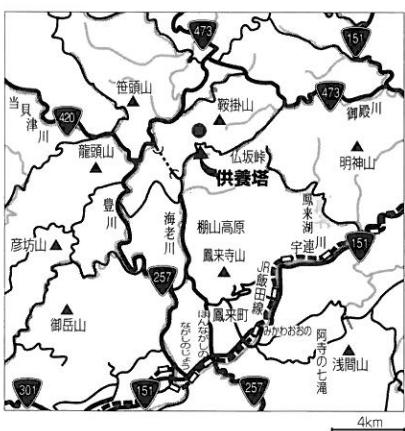
昭明文選卷之三

昭和三十一年七月十

発起人  
高橋



千枚田



▶ 交通案内

◎JR東海飯田線「ほんながしの」駅下車 豊鉄バス滝上停留所  
徒歩約50分 3km

◎主要地方道鳳来東栄線仏坂峠手前約200mを左折 大代農道へ

### ► 所在地

愛知県南設楽郡鳳来町大字四谷地先

### ▶ 水系名及び溪流名

豊川水系海老

#### ▶問い合わせ先



陰山家之墓

28

広島県

◎建立者／奥海田村

◎建立年／昭和六年七月

# 丁未水害之碑

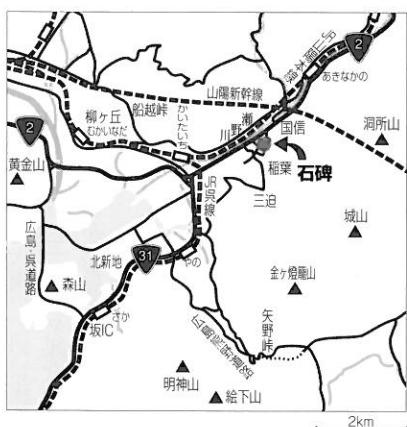
明治四十年七月十五日、広島県奥海田村、坂村、矢野村は水害によって多大な被害をこうむつた。なかでも奥海田村を流れ瀬野川左岸にある八木部落は、山崩れによる濁流と瀬野川の決壊によって家人も土砂の下に埋没してしまうという大災害に見舞われた。

この水害により奥海田村では、流失・浸水した田畠が五六〇町歩にも及んだ。また、一家が全滅したケースも含め、死者は六十八名にも達した。まさに青天の霹靂とでもいべき村始まして以来の大災害となつたのである。この石碑はこうした空前絶後の被害の有様を教訓として後世に残すとともに、亡くなつた方の靈を慰めるため、奥海田村が昭和六年七月に建立したものである。



丁未水害之惨状共同  
情之恩義千載之下尚  
不可忠馬

丁未(ひのとひつじ)の水害の  
惨状は、同情の恩義と共に、  
千載の下(のち)も尚、忘るべ  
からざるなり



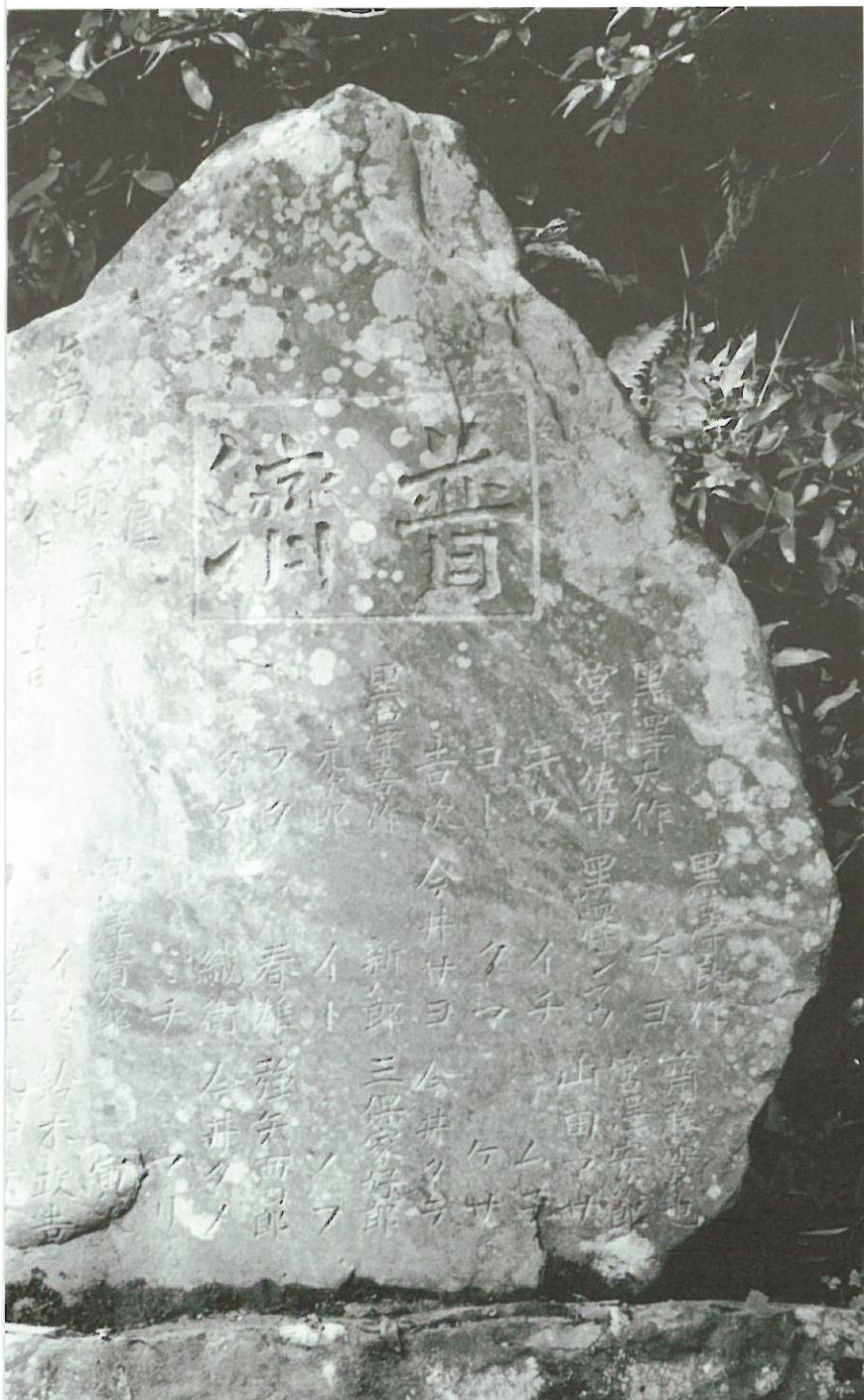
- ▶ 交通案内  
◎JR山陽本線海田市駅下車 徒歩30分
- ▶ 所在地  
広島県安芸郡海田町
- ▶ 溪流名及び河川名  
瀬野川水系三迫川
- ▶ 問い合わせ先  
広島県砂防課 電話082-228-2111



# 普濟の碑

明治四十年（一九〇七年）八月二十五日、群馬県上野村野栗の滝の沢で大雨のために崩壊が起こり、土石流が発生し、野栗集落の中心地を襲つた。土砂は八戸三十七棟を埋没させ、死者四十名、負傷者六名という大災害となつた。そのうち、遺体が発見されたのは二十二名、その他は行方不明のままであった。

災害が起きたのが、旧盆であつたために、犠牲者のなかには他の村の者も含まれており、被害がいっそう大きくなつた。あまりの惨劇に当時の知事も視察に訪れている。同年十一月に村当局と地区村民との手により、被災地近くに、「普濟」（あまねくすくう）の文字と犠牲者の氏名が刻まれた供養碑が建立された。石碑のもう一つは、「悽絶」の標題で災害の惨状と知事視察を記録してある。



## 碑文

悽絶

群馬縣知事從四位勲三等有田義資題額

明治四十年八月大雨涉旬日夜不止山崩川洪各地災害頻至其廿五日群馬縣多野郡上野村瀧之澤山崩壞壓到大字野栗埋沒人家八戸棟數卅七爲死者老幼男女四十一人傷者六人後死體之發見者廿二他不可知噫嗚慘哉報屆縣廳知事有田君隨內務屬某視察現狀捐金弔慰警務長郡長部內有志者又出資弔爲鄉長黒澤萬吉助役今井和三率鄉人敏其荒跡立碑呂弔死者之靈魄竝博義諸氏芳志即是碑之所爲建設而囑予記之伝

明治四十年十一月保岡亮吉選立書

訳文

明治四十年八月大雨、旬の日夜に涉りて止まず、山崩れ川洪れ、各地の災害頻りなり。其の一十五日に至り、群馬県多野郡上野村の瀧の沢が山崩れになつて、大字野栗を厥倒し、人家八戸、棟數卅七を埋没せしめ、死者、老幼男女四十一人、傷者六人、後に死体の発見せらるるもの二十二を爲す。他是知らず、噫嗚！惨なるかな！報、県に届く。知事有田君に応じて、内務に隨ひ、其の現状を視察し、損金弔悼す。警務長、郡長、都内有志の者も又出資す。弔は村長黒澤万吉、助役今井和三、村民を率いて爲す。其の荒跡を敏にし、碑を建て、死者の靈魄を弔し、竝びて義を博くせん。諸氏の芳志は、即ち是れ碑の建設を爲す所にして、囑ねられて予にえを伝に記す。



今井	黒澤	黒澤	黒澤	黒澤	瀧之澤	宮澤	普濟
春雄	イト	イチヤウ	良作	タケ	元次郎	吉次	蕉屋
新八郎	サヨ	クマ	チヨ	フク	喜作	コトウ	明治四十年
柳澤	丸山	鈴木	今井	三保	太作	佐市	八月廿五日
友吉	マリ	ケイ	好郎	屋	書供	太作	瀧文碑
	政寅	西四郎	ノブ	好郎	養崩	山	蕉屋
	次	マリ	クラ	マサ	亨一	黒澤	普濟
		クミ	マサ	安次郎	寛也	齊藤	明治四十年
			ム子	マサ	亨一	山田	八月廿五日
			ケサ	マサ	寛也	黒澤	瀧文碑
			ノブ	マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	寛也	宮澤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	寛也	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一	齊藤	普濟
				マサ	亨一	山田	明治四十年
				マサ	亨一	黒澤	八月廿五日
				マサ	亨一	齊藤	蕉屋
				マサ	亨一	山田	普濟
				マサ	亨一	黒澤	明治四十年
				マサ	亨一	齊藤	八月廿五日
				マサ	亨一	山田	瀧文碑
				マサ	亨一	黒澤	蕉屋
				マサ	亨一		

# 砂防記念碑



渡良瀬川上流域では、足尾銅山の煙害により荒廃が著しかった。これに対し明治三十年五月、当時の農商務大臣・大隈重信は「足尾国有林造林及びその他の取扱い心得」の訓令を発し、これを受けて当地の林野に造林を試みた。しかし多くの木は枯死した。

その後、明治三十五年に鉱毒調査委員会が足尾山地の状況を踏査。造林のほか砂防工事の必要性を認め、これを答申した。

その結果、明治三十九年より林野の復旧工事のなかに砂防工事を含めることとなり、これを起工した。

石碑はこの事業を記念して明治四十一年、磯西英三によつて建立されたものである。

## 碑文

砂防記念碑

工事人

加藤千代吉

星野信次郎

発起人

同

神山作次郎

大宮初五郎

磯西英三

賛成人

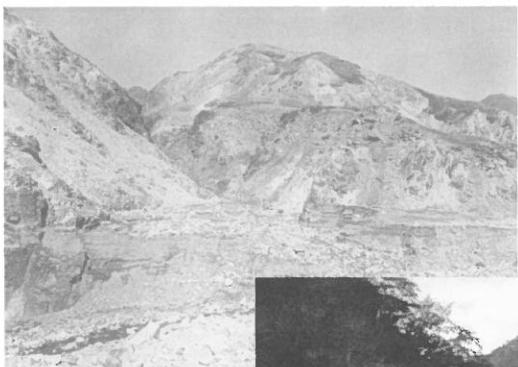
福田松吉

大宮竹次郎

杰戸巳之

明治四十一年建設

※他の文字は破損があり判読不能



久藏川と長平沢合流点  
昭和13年11月撮影



平成8年11月撮影



久藏川と下桐久保沢合流点 昭和13年11月撮影



平成8年11月撮影



### ▶ 交通案内

◎JR両毛線よりわたらせ渓谷鉄道間藤駅下車

町内バス赤倉行き赤倉バス停下車 赤倉バス停より約6km

徒歩約1時間30分

◎国道122号線田元交差点を松木渓谷方面へ約4km(足尾ダム)

足尾ダムより約4.5km 徒歩約1時間

### ▶ 所在地

栃木県上都郡足尾町久藏川上流

### ▶ 水系名及び溪流名

利根川水系渡良瀬川左支久藏川

### ▶問い合わせ先

建設省渡良瀬川工事事務所 砂防調査課 電話0284-73-5559



# 遭難碑

群馬県碓氷郡松井田町で明治四十三年八月十日、連日降り続いた雨により、現在の恩賀橋付近で山崩れがおこり、川がせき止められて天然ダムが形成された。そこで危険を感じた二、三百メートル下流の家は、急を告げて村人たちに援助を求めた。村人らは各戸から一名以上が駆けつけ、提灯の灯を頼りに家財道具などの搬出にあたつたが、夜半の二時頃、ついにこの天然ダムが決壊した。屋根よりも高いと思われる鉄砲水が流下し、濁流は家に襲いかかり、家人はもとより手伝いの村民もろとも押し流してしまった。

この濁流に呑まれて死亡または行方不明となつた人数は十七名にのぼつた。いずれも働きざかりの人達であったといふ。大正十三年、恩賀の人々は犠牲者の冥福を祈るとともに、悲劇を後世に伝えるために遭難碑を建立した。



碑文

碑文(隸書の陰刻)

可俱煩天災地殃之變明治四十三年八月十日此地  
我然有潤雨降濁水滔々浸人家疾風暴雨增逞而至  
拔山碎石倒壞家屋此際人々欲救某家急赴之忽為  
激浪怒涛之所襲不遑逃避可憐之某家人俱偶流亡  
溺死難者拾有七人噫某何悲慘哉追想當時有感慨  
無量実難禁者下記者即遭難人名也爾來既十有三  
年茲建石以追弔某靈云爾

曹洞宗弘誓山長樂寺の僧禎山  
蒙額撰文書ともに甘樂郡下仁田町大字西牧字本宿

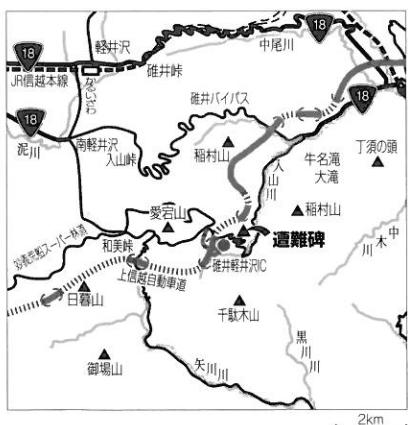
読み下し文

天災地殃の変おそるべ。  
明治四十三年八月十日、この地  
俄然雨降りそぞぐ有り、濁流滔々として  
人家を侵し、疾風暴雨増逞して  
山を抜き石を碎き家屋倒壊に至る。この  
際人々某家を救わんと欲し、急ぎ之に赴くや  
忽ち、激浪怒涛の襲う所となる。逃避に遑  
あらず。これを憐れむべし。其の家人と俱に  
流亡溺死の難に遭う者十有七人なり。  
噫！某れ何ぞ悲惨なるや、當時を追想し

感概無量實に禁じ難者有



り。  
下記の者、即ち遭難の人  
名なり。  
爾來既に十有三年茲に石  
を建て以つて其の靈を追  
弔してしかう。  
(碑の下部に男九人、女八人  
の氏名がある。全員佐藤姓で  
ある)



- ▶ 交通案内
  - JR信越線横川駅下車 自動車にて約20分
  - 上信越自動車道碓氷軽井沢インターチェンジより車で1分
- ▶ 所在地
 

群馬県碓氷郡松井田町大字恩賀地内
- ▶ 水系名及び溪流名
 

利根川水系烏川右支碓氷川右小支入山川
- ▶問い合わせ先
 

建設省利根川水系砂防工事事務所 調査課 電話0279-22-4179

# 細野氏招魂碑

明治四十四年八月、長野県北安曇郡小谷村南小谷の稗田山が突然大崩落をおこし、激流となつた土石流は浦川になだれ込んだ。この崩落によつて、かつて小谷五人衆のひとつであつた細野家とその同族ら二十三名は土砂とともに押し流され、死亡または行方不明となつてしまつた。八月八日の未明のことであつたといふ。

幸いなことに、細野家の父子は家から離れており、この災害の犠牲にならずにすんだ。そこで父子は大正十二年四月、招魂碑を建立して一族の犠牲者を悼んだ。細野氏招魂碑は南小谷石坂のお宮の横の墓地の一角にあり、多くの犠牲者を呑み込んだ浦川を見下ろすように建てられている。



## 碑文

伯爵 小笠原長幹題額  
 明治四十四年八月八日信州北安曇郡南小谷郷稗田山崩壊細野弥三左衛門母梅妻不二及同族寅治松兵衛将治三家  
 惣二十有二人為所埋没蓋地熱鬱蒸自生空洞來此災厄去慘之又慘害天地一大變事矣按細野氏天文弘治間小谷五騎  
 之一而遠祖織部正以勇武著于鎌府時代及南北朝首勤 王事戰国時屬小笠原氏有驍名後歸武田氏張勢威信越境上  
 徳川霸府立也為松本藩士爾來子孫相承克聿脩祖德以至明治御宅園圍巍然存旧觀為一鄉望族詎料是日吻夷春春甘  
 睡中連山乍鴉動土煽起蔽裏川全溪宛如天柱折地維缺細野家五百年基業之地寺圖譜器尽歸烏有偶主翁潔一女在  
 隣邑元湯嫡男繁勝亦游學東京並免慘禍於是父子相謀移塲域於狩倉山麓大師平以其月十三日舉弔祭典頃繁勝欲建  
 碑論後昆囁文繁勝從事操觚令名頗聞與余有旧誼不可辭乃記便概繫以銘銘曰

天災地妖

陵谷変遷

忠孝名家

一朝蕩然

幸存父子

祖業再全

幽魂有歸

以平以安

大正十二年季四月

東京商科大學教授  
杉山令吉撰并書

訳文

明治四十四年八月八日、信州北安曇郡南小谷村の稗田山崩壊し、細野弥三左衛門、母梅、妻不二及び同族の寅治、松兵衛、将治の三家族二十有二人は、埋没する所と為る。蓋し地熱鬱蒸し、自ら空洞を生じ、此の災已來たり去る。慘の又慘たる天地の一大事なり。接するに細野氏は天文引治の間に、小谷五騎の一にして、遠祖は織部の正なり。勇武を以て鎌倉時代、及南北朝首勤に著さる。王事戦国時は小笠原氏に属して驍名有り。後に武田氏に帰し、勢威を信越の境上に張る。徳川幕府の立するや、松本藩士と為る。爾來子孫相ひ承け、祖先を思ひてその徳を述べ修める。以て明治に至り、邸宅、園圃の(に)わ)、巍然として旧觀を存む、一郷の望族(人望のある家柄)為り。詎すれぞ是の日あるをかへらん。吻夷かに、昏々として甘睡の中、連山乍鳴動し、土焰巻き起し、裏川を蔽ひ、全溪宛は、天柱の地に折るが如し。維に細野家五百年の基業の地と、図譜器とを失く。尽く帰するに、鳥、偶、主は翁の第一女の隣邑、之湯に在るに有り。嫡男繁勝も亦、東京に游学せり。並びて惨禍を免れたり。是に於ひて、父子相ひ謀り、塲域(墓地)を狩倉山麓の大師平に移し、其月十三日を以て弔の祭典を挙ぐ。頃して繁勝碑を建てんと欲す。後に昆に文に来囁し、繁勝は操觚(文筆業)に從事し、今名頗る聞こゆ。余とは旧誼有り、辞すべからずして乃ち梗概を記す。繫するに銘を以てす。銘に曰く、天災地妖、陵谷を変遷す。

幸ひなるかな父子は存す。  
祖業を再び全ふすれば、幽魂歸する有り。  
以て平らかならん、以て安らかならん。

大正十二年季四月

東京商科大學教授

杉山令吉撰并書



稗田山崩れ



### ▶ 交通案内

◎JR大糸線中土駅下車 徒歩2.3km

◎国道148号外沢トンネル内分岐2.1km

### ▶ 所在地

長野県北安曇郡小谷村石坂

### ▶ 水系名及び溪流名

姫川水系浦川

### ▶ 問い合わせ先

建設省松本砂防工事事務所 調査課 電話0263-33-1115



# 幸田文文学碑 (歳月茫茫)

明治四十四年八月、突如として小谷村を襲つた稗田山の大崩壊は死者二十三名、家屋田畠など四十町歩を流失する惨事となつた。そして平成四年十月、その八十周年を記念し、大災害で亡くなつた方の慰靈と災害を後世に語り継ぐ指標になつてほしいとの思いを込めて、この地を見聞して『崩れ』という作品を残した作家・幸田文の文学碑を建立した。

しかし平成七年七月十一日に長野、新潟両県を襲つた集中豪雨によつて発生した土石流がこの碑を直撃した。幸いにも石碑はすぐに発見され、松本砂防工事事務所によつてただちに再建された。平成八年六月には再建を記念した植樹式が開催された。



## 歳月茫茫

災害の話をききながら歩けば感無量だった。道のべに生い茂る夏草は鮮やかに青くまことに歳月茫茫の思いにうたれる。

稗田山々、ちょうどこの真正面というので、見えないと承知しながらも目をこらせば、霧の粒が砂子になって浮動する。そんな中で鶯が近々と鳴いて、激しい川音をそらす。

## 「歳月茫茫稗田由来」

明治四十四年八月八日午前三時、突如として襲った稗田山の「抜け」は、乾ける炎となって天地を鳴動させ、死者二十三名、家屋田畠等七十余町歩を流出せしめた。世に日本三大崩れのひとつと言われ、言語に絶する大惨事であった。

芸術院会員幸田文先生は、夙に稗田山に関心を持たれ、昭和五十二年この地を見聞され、その感懷を「婦人の友」に「崩れ」として発表された。「歳月茫茫」はその「崩れ」から抄出したものである。

災害発生以来八十年、建設省直轄砂防工事着手以来三十年、世移り人変り歳月の歴史もまた、茫茫たる彼方に見え隠れするものとなつた。

幸田文文学碑建立委員会  
撰文 田中欣一  
書 宮原正愛

## 幸田文「崩れ」より

ここに受難の御靈に鎮魂の賦捧げ、幸田文文学碑を建立し、山河大地の永き平安を石に刻して祈念する。



- ▶ 交通案内
- ◎ JR大糸線中土駅下車 徒歩2.7km
- ◎ 国道148号外沢トンネル内分岐1.8km
- ▶ 所在地
- 長野県北安曇郡小谷村石坂
- ▶ 水系名及び溪流名
- 姫川水系蒲川
- ▶ 調査課 電話0263-33-1115



## 砂防工事記念碑

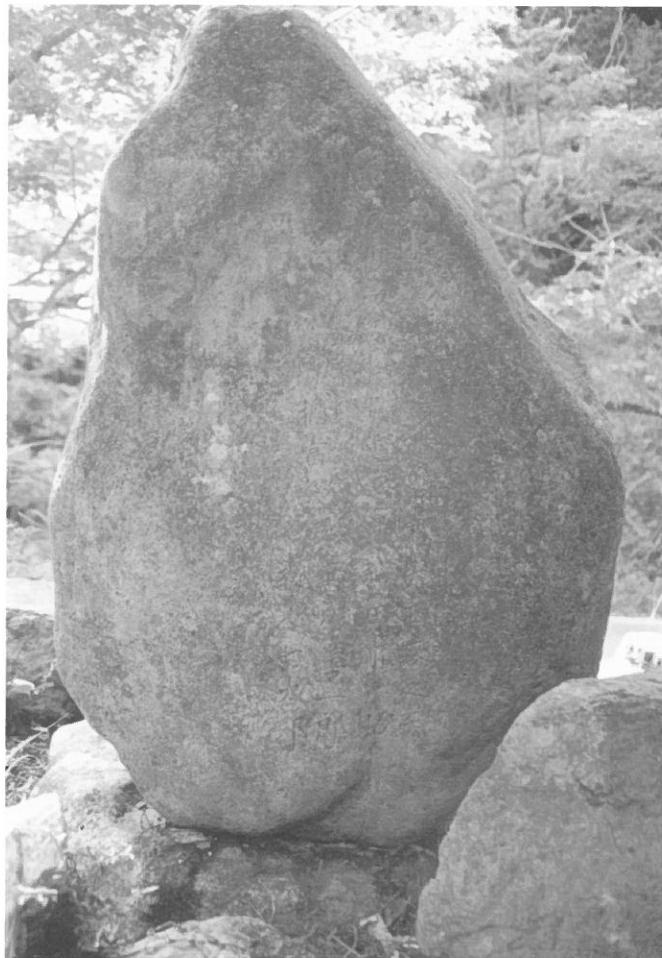
琵琶湖に流入する、宇曽川の上流域の山々は、古くから樹木が育成・繁茂せず荒廃が進んでいた。このため、土石の流出が著しく、度々氾濫を繰り返す「暴れ川」であった。これに対し、明治二十三年に砂防工事が始められた。山腹工には、地元泰莊町の砂防の先人、西川作平が発見・推奨したヒメヤシヤブシが主として用いられ、黒松との混植により成功をおさめたのである。石碑は、宇曽川砂防工事竣工を記念して、大正元年建立されたものであり、今日では見事な緑の山が復活している。



碑文

表面・砂防工事記念  
裏面・自明治四拾四年  
至大正元年

管理者 村長 大西又之蒸  
監督工事 和田市○助 不明  
担当総代 西川善一郎  
林 七太郎



- ▶ 交通案内  
◎ 国道307号 上蚊野交差点より5km 車で約8分
- ▶ 所在地  
滋賀県愛知郡秦荘町松尾寺
- ▶ 水系名及び溪流名  
淀川水系宇曾川
- ▶ 問い合わせ先  
滋賀県砂防課 電話0775-28-4191



## 護天涯

石碑の設立年は大正初期と思われるが、設立者など詳しいことは不明である。ここ常願寺川では、安政五年（一八五八年）に鳶山の崩壊により、下流住民に壊滅的な被害を与えた。古くから常願寺川との鬭いは止むことなく続けられが、明治末期立山カルデラの中の湯川や泥谷に砂防ダムが建設されるに及んで、ようやく治水砂防の黎明を見ることになった。

まさにこのとき「天涯を護る」という文字が、人々の心に浮かび上がってきたのに違いない。「護天涯」と彫られた石は、大正はじめに泥谷上流砂防ダム付近に設置され、一度土石流により流失したが、昭和五年（一九三〇年）に湯川・泥谷合流点付近で発見された。現在ではその一部が切り取られ、泥谷一号砂防ダムの袖部に埋め込まれている。





湯川・泥谷合流点



- ▶ 所在地  
富山県中新川郡立山町芦嶺寺字ブナ坂外  
▶ 水系名及び溪流名  
常願寺川水系湯川  
▶問い合わせ先  
建設省立山砂防工事事務所 調査課 電話0764-82-1111



## 山静川清の碑

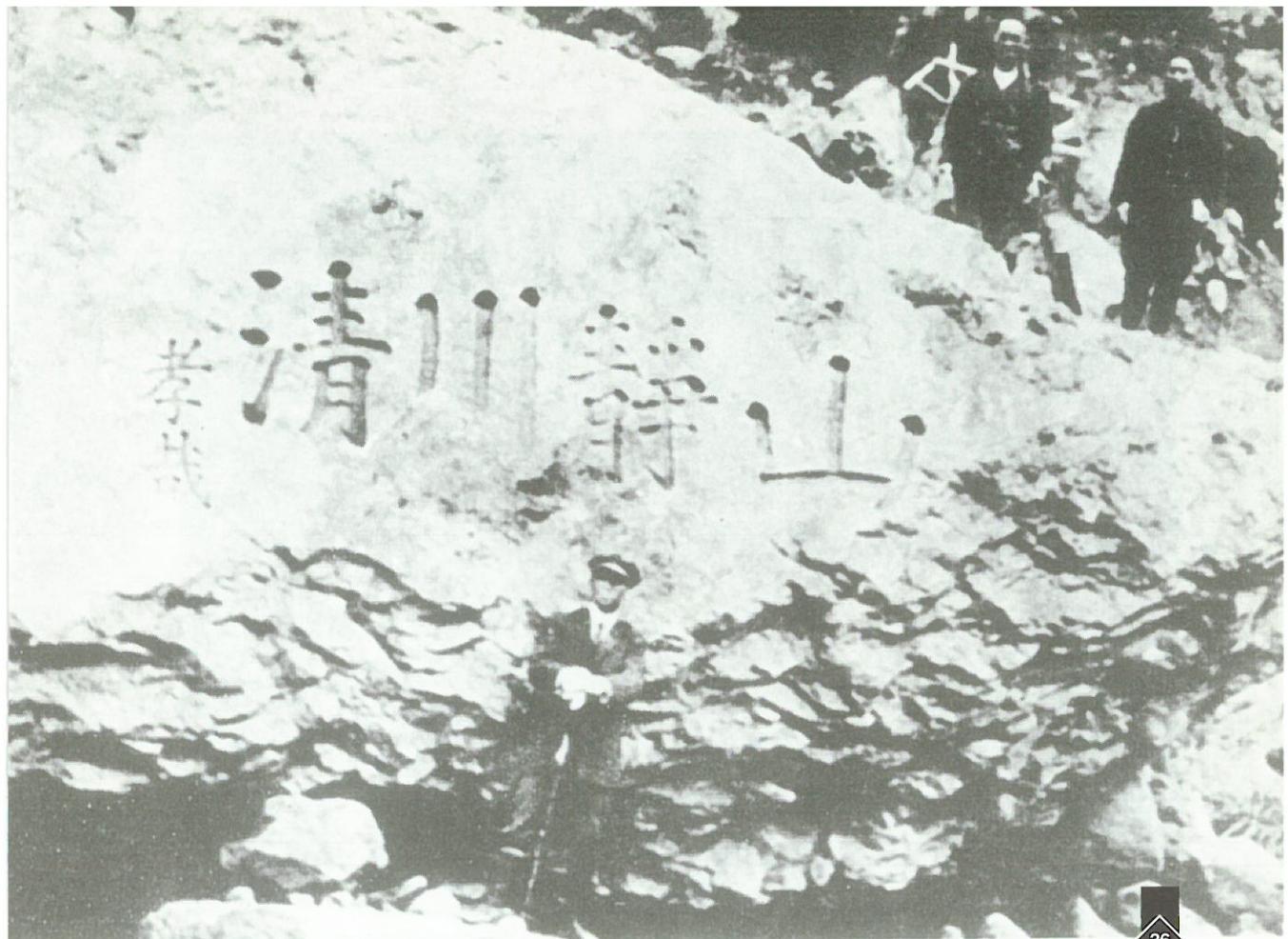
立山カルデラを源流とする常願寺川は日本屈指の急流河川で、安政五年の鳶山の崩壊以来下流の富山平野は大きな被害を受け続けていた。そこで明治末期から大正のはじめにかけて、当時の富山県知事は常願寺川の水源を視察した。この結果、早急な砂防工事による災害の起ころない理想的な山や川が必要である、という願いがたかまゝ、大正六年頃に石碑を建立。「山静かにして、川清し」という碑文は、視察の際の富山県知事の思いがそのまま現われたものであろう。

この石碑は、立山カルデラの中に建立されたものと思われるがその後流出し、現在まで発見されていない。写真が残つてゐるのみである。

なお、常願寺川はこの後も、県が嘗々と築きあげてきた砂防施設をすべて無に帰してしまふほどの災害を頻発ついに大正十五年、国の直轄砂防工事が開始され現在に至つている。



立山カルデラ



碑文  
山静川清  
孝哉



災害後の白岩砂防ダム(大正8年)



富山県砂防工事時代の事務所



# 鎌倉沢川砂防記念碑



新潟県南魚沼郡で俗に「六日町洪水」といわれている災害は大正十年（一九二一年）四月五日の豪雨によって引き起こされた。浸水家屋、百五十余り。増水して奔馬の如く暴れまわる流勢に堤防は破られ田は土砂に埋まり無残なありさまとなつた。荒廃が著しかつた鎌倉沢川流域は、上流の渓谷の土質が脆く、ひとたび豪雨に令えば土石流が発生する危険に常にさらされていてるのである。

被害に合った住民は県議会に請願し、県による砂防工事が実施されることとなつた。大正十四年八月に測量に着手、工事は昭和二年（一九二七年）から行われ昭和十年に完成了。コンクリートを使用した人力施工の大事業で、工費は当時の金額で十四万五千円余りの巨費だつた。多大な恩恵を受けた地域住民の喜びは計り知れず、この石碑が建立されたものである。

表  
面  
砂防記念碑

新潟県知事 宮脇梅吉書

裏  
面

## 鎌倉沢川砂防工事完成碑陰記銘

鎌倉沢川の上流の渓谷は土質が脆弱で地層は滑り流出は頻繁で、災害か所は止まる所を知らず。一朝豪雨となれば、即ち洪水は噴き蕩がり、土砂滔々として奔馬の如く、堤は崩れ塘が壊れること涯し無く、瘦せ田はこれがために荒廃して惨たらしく、郷民の苦しみは言い表すことができない状態であった。

有志はこの患を県会に請願し、其の決議を得て県営工事を起こした。

昭和二年より同六年に至り、上流工はすでに成り、しかし下流には及ばなかった。昭和七年復旧の時局をもつて民に令し、協力を得て土木業事大いに進み、遂に下流に及び、同十年見事に完成した。

工費は前後實に十四万五千餘円を算した。

このなかにあつて、前期に出た国県費は十の九にして、その関涉地の吉里、思川、片田、竹俣、同新田及び六日町の六部落は僅かに十の一に過ぎなかつた。

後期にあつては即ち国県は百の九十五を補充し、町及び関係部落は支弁百の五にして、最後二か年は一金も割り当てしないで終わつた。

これによつて、積年の災禍の源を塞ぎ、土民は各々安らかに就業でき、さきの荒れはてた田畠は年ごとに復旧し、一郷は富裕と成つた。

この昭和の恩澤は郷土有志の斡旋あらずしてよろしきを得ることはできないものである。

これは誠に百年の大計を樹つといふべきである。

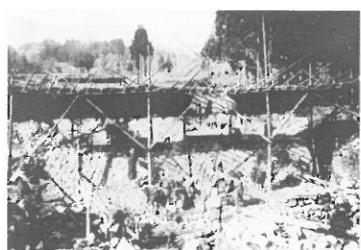
铭にいふ。堤を修し、水を治め荒を開き、田を成す。

中国の聖人禹の大功に等しい。広く後の世に功績を称える。

昭和十一年十月 県会副議長 上村守策 記



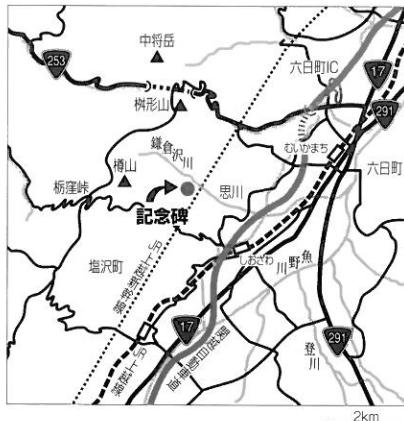
災害状況



復興状況



完成



## ▶交通案内

◎JR上越線塩沢駅下車 徒歩20分

◎関越自動車道六日町ICより5km 車で約5分

## ▶所在地

新潟県南魚沼郡塩沢町大字思川地先

## ▶水系名及び溪流名

信濃川水系鎌倉沢川

## ▶問い合わせ先

新潟県砂防課 電話025-285-5511

